

2024 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	保育における実践的な三線の演奏技能を習得するための教材開発
キーワード	①保育、②三線の演奏技能、③伝統芸能

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	アカミネ エリコ 赤嶺 絵吏子
配付時の所属先・職位等 (令和6年4月1日現在)	沖縄女子短期大学 児童教育学科 講師
現在の所属先・職位等	沖縄女子短期大学 児童教育学科 講師
プロフィール	2001年3月 琉球大学法文学部人間科学科卒業 2021年3月 琉球大学大学院教育学研究科教科教育専攻(芸術表現教育専修)修了 2021年4月 沖縄女子短期大学児童教育学科助教 2024年4月 沖縄女子短期大学児童教育学科講師

1. 研究の概要

本研究では、保育者・教育者を目指す学生に、沖縄の伝統芸能(以下、伝統芸能と略す)や三線の学習に関するアンケート調査を実施するとともに、県内の保育施設を対象に伝統芸能の活動と三線の活用等に関するアンケート調査を実施し、両者における現状と課題を明らかにした。そのうえで保育における三線の実践的な演奏技能を習得するための学習課題を整理し、筆者が担当するゼミナールの所属学生11名(以下、学習者と記す)を対象に、課題解決に向けた教材開発と教育実践を行った。そして、教育実践記録や学習者への事後アンケート調査の結果をもとに、その成果と課題を明らかにした。教育実践にあたっては、徳田泰樹氏(琉球古典音楽野村流音楽協会師範。以下、三線指導者と記す)と、比嘉憲弥氏(三線の店島人工房店主。以下、三線職人と記す)の両名にご協力いただいた。

2. 研究の動機、目的

令和5年6月、筆者が担当する授業内で、保育者・教育者を目指す1年生の学生を対象に伝統芸能の学習に関するアンケートを実施したところ、97.6%の学生が「将来、子どもに伝統芸能を伝えたいと思う」、さらに91.5%の学生が「三線を弾けるようになりたいと思う」と答えた。この結果から、多くの学生が伝統芸能の伝承と三線の演奏技能の習得に意欲を持っていることがわかる。しかし、そのための学修機会や教材は見あたらず、学生のニーズに応えることができていないのが現状である。

保育所保育指針等の領域「環境」では、「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむこと」が求められている。また、領域「表現」では「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」ことが示され、同内容について、『保育所保育指針解説』(厚生労働省2018)によると、「保育士等などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、子どもが音楽に親しむようになる上で、重要な経験である」(p.274)とされている。保育者が三線の演奏技能を身につけ、日常の保育活動の中で活用していくことで、子どもは遊びを通して三線の音色や地域の伝統

的な歌やリズムに親しむことができるだろう。

そこで筆者は、三線の演奏技能を習得するための教材を開発し、保育者を目指す学生を対象に教育実践を行い、その成果と課題を明らかにしたいと考えた。

3. 研究の結果

本研究では、学生と保育施設に実施したアンケート調査の結果から、両者に共通する課題を「伝統芸能と三線の5つの学習課題」として整理し、それぞれの課題解決に向け、教育実践を行った。その概要を【表1】に示す。また、三線の演奏技能の習得に向けて作成した教材の一例（三線の自主練習用教材）を【図1】に示す。教材には曲の工工四の他、歌詞とふりがな、歌詞の意味と曲の成り立ちを記した。そして、調絃を幼児の声域に合わせて設定し、補助資料として歌の旋律を五線譜で示した他、二次元コードを読み取ることで三線指導者による模範演奏の動画と、旋律のみの音源を視聴できるようにした。教育実践の終了後、学習者に事後アンケートを実施したところ、【図2】の通りの結果となった。

【表1】「伝統芸能と三線の5つの学習課題」の解決に向けた教育実践の概要

学習課題	課題解決に向けて行った教育実践
(1)地域の歴史・文化・行事と伝統芸能のつながりについての知識	・沖縄の歴史・文化・行事と伝統芸能についての説明 ・首里城公園と沖縄県立博物館でのフィールドワークの提供 ・沖縄の文化を題材にした絵本の教材研究と保育現場での読み聞かせ体験の提供
(2)伝統楽器の種類と特徴についての知識	・三線指導者による伝統楽器の種類と役割等についての説明 ・三線と胡弓の鑑賞活動の提供（演奏：三線指導者） ・胡弓の演奏体験活動の提供
(3)エイサーと琉球舞踊の曲、また民謡や沖縄のわらべ歌についての知識	・エイサーや琉球舞踊でよく用いられる曲やその他の民謡についての説明（歌詞の意味、リズムの特徴、成り立ち等） ・沖縄のわらべ歌の歌詞や遊び方等についての説明
(4)三線の演奏技能及び工工四（三線用の楽譜）を読むための知識	・三線講師による歌三線及び工工四の読譜法の指導 ・筆者と三線講師の共作による三線自主練習用教材の提供 ・西洋音楽の階名と三線の各音を連動させた読譜法の指導 ・保育現場での三線の演奏披露体験の提供
(5)三線の構造や仕組みについての知識及び三線の取り扱い方に関する技能	・三線職人による三線の歴史や種類、音色の特徴、材料や構造、三線づくりの工程等の説明と三線の皮張り体験の提供 ・三線指導者による三線の取り扱い方の説明と、絃の張り替え方の指導 ・身近な材料を用いた子ども向け三線づくりの指導 ・子どもとの三線づくり体験の提供

久高万寿主
アガサマシメ

メロディ音源

三線調絃

久高万寿主

本調子

三線の構造や仕組みについての知識及び三線の取り扱い方に関する技能

三線の演奏技能及び工工四（三線用の楽譜）を読むための知識

三線の歴史や種類、音色の特徴、材料や構造、三線づくりの工程等の説明と三線の皮張り体験の提供

三線指導者による三線の取り扱い方の説明と、絃の張り替え方の指導

身近な材料を用いた子ども向け三線づくりの指導

子どもとの三線づくり体験の提供

三線の構造や仕組みについての知識及び三線の取り扱い方に関する技能

三線の演奏技能及び工工四（三線用の楽譜）を読むための知識

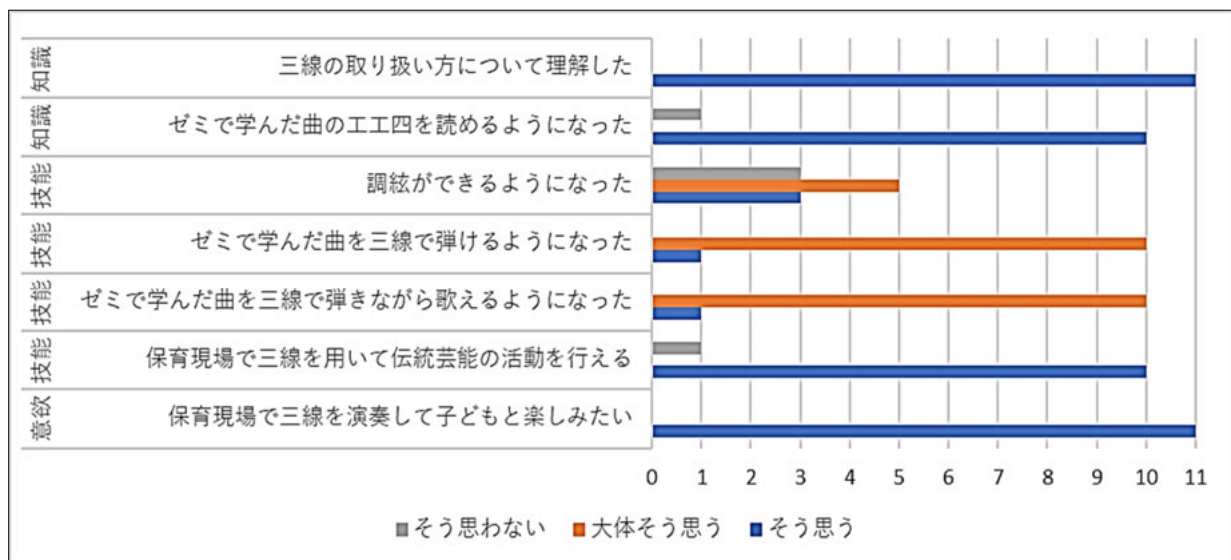
三線の歴史や種類、音色の特徴、材料や構造、三線づくりの工程等の説明と三線の皮張り体験の提供

三線指導者による三線の取り扱い方の説明と、絃の張り替え方の指導

身近な材料を用いた子ども向け三線づくりの指導

子どもとの三線づくり体験の提供

【図1】三線の自主練習用教材の一例



【図2】事後アンケートの回答結果（回答総数 11）

事後アンケートでは、教育実践について学習者から以下のような声が寄せられた（自由記述・一部抜粋）。

- ゼミを通して三線の面白さにたくさん触れ合えたし、美しい沖縄の伝統音楽・文化を子ども達にも伝えていきたいと感じた。
- ゼミの活動で知識・技能どちらもついた。エイサーなど特別な道具がなくてもできるものがあると分かった。
- 三線の色々な曲を覚えて歌って演奏できるようになった。今まではなんとなく覚えたりしていたが、今回のゼミで指の位置や音の出し方をちゃんと覚えて応用することができるようになった。
- 三線をグループごとで分かれて練習したりしたら、歌を歌う練習が恥ずかしい時にやりやすくなると思いました

そして、教材については以下のような声が寄せられた（自由記述・一部抜粋）。

- 二次元コードを読み込んで動画に飛べる機能がとても便利でした。譜面を読むだけでなく、音を聞いて練習したことでより早く演奏できるようになったと感じた。
- 教材の中の全部の情報が面白くて便利だったのですごいと思ったのですが、歌詞の読み方と意味がとても面白くて何度も読み返しました。旋律の音源と五線譜よりは動画の方が自分でイメージして繰り返し練習しやすかったのも、それを主に活用しました。
- 1枚の紙で工工四を見たり、動画が見られたのがとても練習しやすかったです。

事後アンケートの結果から、教育実践の内容及び教材が三線の演奏技能の習得に一定の効果があつたと結論づける。しかし、三線の調絃技能や三線の演奏技能の習得法については改善が求められる。また、教材について動画が練習に役立ったとする声があつたことから、今後は動画のさらなる効果的な活用法を探る必要もあるだろう。

筆者は研究当初、学習者が慣れ親しんできた西洋楽譜を活用した教材の作成を検討していたことから、学習者に、工工四の内容を五線譜やタブ譜に置き換えて読む学習法を提案した。しかし、学習者から、「工工四そのものを読めるようになりたい」という声が挙がったため、その意見を尊重し、他の楽譜に置き換えることなく、工工四を中心に据えた教材を作成した。この出来事から、学習者が沖縄の伝統音楽をそのままのかたちで理解したいと考えていることや、三線本来の楽譜である工工四を読むことに意義を感じているということがわかった。また、教材の動画に対して学習者から好意的な意見が寄せられた背景には、三線指導者の姿勢や歌いまわし、手の動き、発声法等をよく観察し、それらを真似て演奏技能を身につけようとする

る学習者の思いがあり、伝統芸能で行われる口伝が効果的な学習法であったことを改めて再認識する機会となった。

今回の教育実践にあたり重視したのは「五感を通した直接的体験」である。三線指導者の生演奏や直接指導、数々のフィールドワーク、子ども用手作り三線の工作、保育実践体験等を通して得た感動、発見、気づきや学びが学習者の意欲向上や演奏技能の習得に結びついたので考えている。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究の一環として実施した保育施設アンケート調査からは、保育現場における三線の演奏技能の習得、そして伝統芸能に関する知識の習得について高いニーズがあることがわかった。中には、「学びたいがその機会がない」、「講習会を開催してほしい」等の声もあった。

そこで、今後は新たに保育現場での講座の開催等も検討していきたいと考えている。沖縄の伝統芸能や音楽は、先人から受け継がれた貴重な財産であり、筆者にはそのバトンを次世代に渡していく使命があると考えている。楽器や歌の音色は生ものであり、繊細な息遣いや心を震わす音は人から人へという方法でしか受け継がれない。テクノロジーを活用しながらも、音楽の原点や人間が持つ感性を大事にして、これからも精力的に活動を続けていきたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は本研究への支援を賜り誠にありがとうございました。今や電子機器等でいつでも手軽に音楽が手に入る時代ですが、本来、音楽は奏者と聴者が空間を共にし、互いに心を通わせながら味わうものです。しかし、安価で気軽に手に入る録音された音や音楽とは違い、本物の楽器は高価であり、簡単に購入できるものではありません。また、生演奏を鑑賞したり、楽器の演奏指導を受けたりするためには費用が必要になります。

今回、奨励金を三線の購入や、三線職人による講習、琉球古典音楽奏者による演奏の鑑賞や三線指導、手作り三線の材料の購入等に使用させていただいたことで、学習者は地域が生んだ楽器の音色を存分に全身で感じながら、その演奏技能を習得することができました。そして、電子機器に頼らず自ら奏で、歌うことの楽しさを経験し、人と人が音や音楽を介してコミュニケーションを交わし、つながり合う喜びや感動を得ることができました。これもひとえに日本私立学校振興・共済事業団と、その関係者の皆様のご支援のおかげです。重ねて心より感謝申し上げます。

学習者の学びは今後、保育現場で活かされ、子ども達はスピーカーから流れる録音された音や音楽ではなく、保育者の生き生きとした演奏と歌声にのせて、自分が暮らす地域の歌を歌い踊り、日常生活の中で伝統の音色に親しんでいくことと思います。今後も、沖縄に暮らす子ども達に、三線の美しい音色を通じて、地域の豊かな文化や伝統を伝えていけるよう、研究に励んでいく所存です。



【写真1】三線指導者による稽古風景



【写真2】子ども用手作り三線